吉野町内の謡曲（能）ゆかりの場所

■吉野には謡曲（能）の舞台がいっぱい！

能、というと難しく感じる人がおられるかもしれません。しかし、現代的にいうなら、能は舞台演劇の元祖とでもいうべきものです。その能で演じられる物語の中には、歴史的事件が題材のものも多く、吉野が舞台の物語もたくさんあるのです。

また、吉野には能の物語（謡曲）にかかわる伝承が多くのこされています。例えば、謡曲『国栖』は国栖の翁が大海人皇子を助ける物語ですが、同じ内容の伝承が吉野町国栖地域にのこります。また、謡曲『嵐山』は、吉野の桜が京都に移されたことで物語がはじまりますが、吉野町吉野山には吉野の桜とともに「嵐山」の地名が京都に移されたと伝わります。能の物語と伝承が絡み合う「幽玄」の世界を、是非吉野でご覧ください。

■謡曲（能）で登場する主な人物ほか

【飛鳥時代】

- 天武（清見原）天皇　…飛鳥時代の天皇。大友皇子と壬申の乱で戦った。
- 国栖の翁　…現・吉野町国栖にいたおじいさん。大海人皇子を助けたと伝わる。
- 久米仙人　…竜門寺で修行をした仙人。『今昔物語集』などに逸話がのこる。

【平安時代】

- 聖宝（しょうぼう）　…醍醐寺の開祖。柳の渡しの整備などをした、吉野山の中興の祖とされる。
- 源義経　…平家打倒を成した武将。兄・頼朝に追われ、吉野山などを転々とした。
- 静御前　…源義経の愛妾。白拍子の名人として知られる。
- 佐藤忠信　…源義経のお供。義経一行が吉野山を脱出するとき、殿を務めた。
- 西行法師（さいぎょう）　…歌人。吉野の桜の歌をおおく残し、吉野と桜のイメージを深めた。

【鎌倉〜室町時代】

- 護良親王　…後醍醐天皇の皇子。吉野山などで鎌倉幕府と戦った。
- 後醍醐天皇　…南朝を開いたことで知られる天皇。
- 楠木正行（まさつら）　…後村上天皇に仕えた南朝の有力武将。楠木正成の子。
- 豊臣秀吉　…吉野山で花見をした戦国時代の武将。能好きだった。

【吉野が登場する主な謡曲】

■嵐山（あらしやま）　時の帝に仕える臣下が、吉野から京都の嵐山に移植された桜の様子を見にいく物語です。臣下は嵐山で二人の不思議な老夫婦と出会います。老夫婦から夜をまつよう言われた臣下は、その夜に吉野山の神々の舞と蔵王権現の顕現を目の当たりにすることになるのでした。

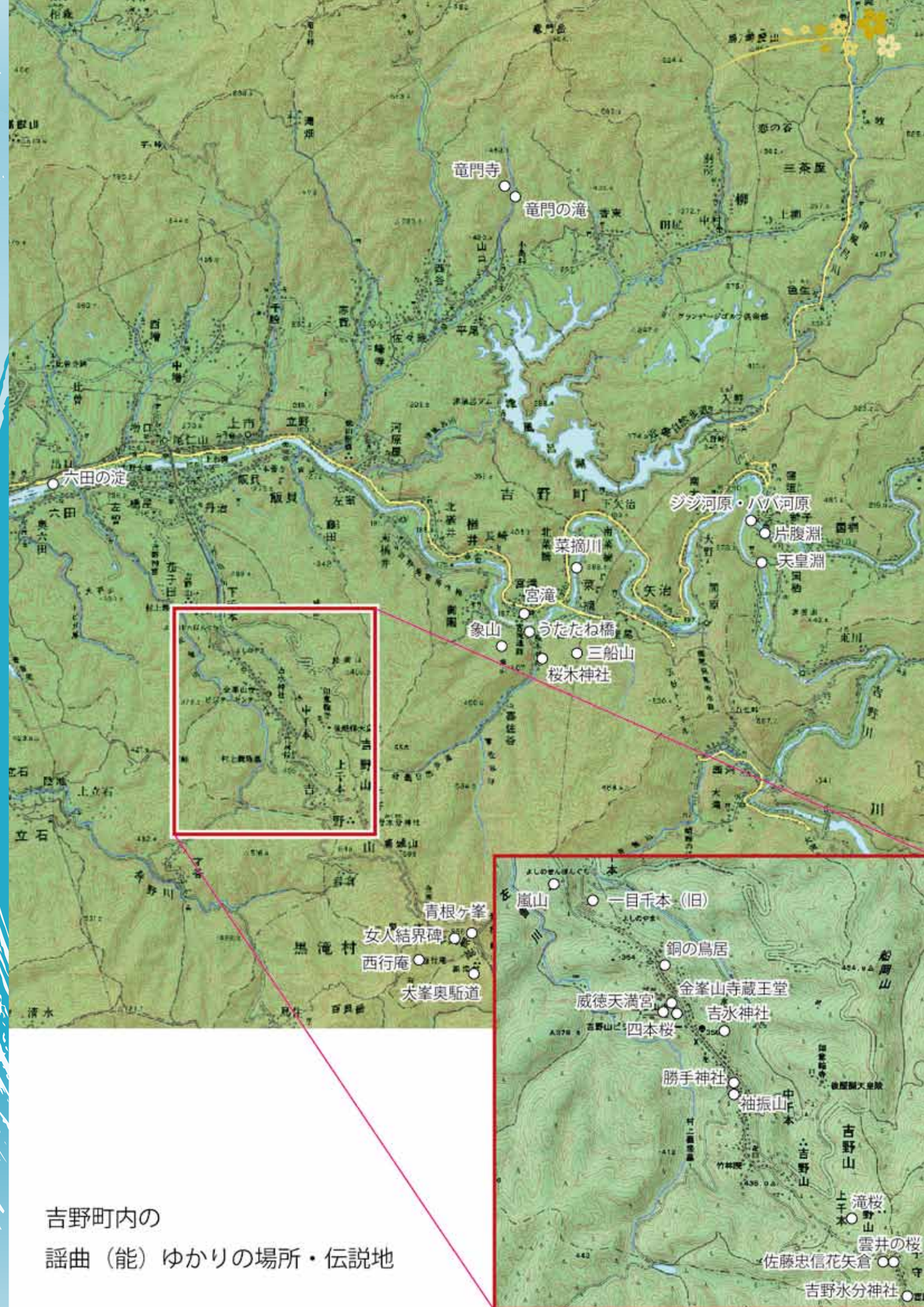
■国栖（くず）　国栖にすむ翁が家に帰ろうとすると、家のあたりに紫雲がたなびいているのをみます。不思議に思って家に帰ると、やんごとなき身分の方・清見原が隠れているではありませんか。話を聞くと、2〜3日食事もせずに追われているといいます。翁は清見原に根ゼリや鮎を献上し、追っ手から匿うことにしました。全てがおわった後、空に天女や蔵王権現が現れ、これから訪れる清見原の御代を祝ったのでした。

■二人静（ふたりしずか）　勝手神社の巫女が菜摘川で菜を摘んでいると、謎の女に弔ってほしいと頼まれます。吉野山に帰った巫女が、神職に事情を話していると、巫女が女の霊に乗っ取られてしまいます。自らを静と名のる女の霊。真偽を確かめるべく、神職が舞を見せるよう言うと、巫女と亡霊の二人は見事な舞いを見せたのでした。

■正行（まさつら）　後醍醐天皇の遺言により、即位した第七皇子と皇居を守る楠木正行。櫓を建てようとするなど、皇居守護を深く決意します。間もなく、敵の大軍が吉野山を襲います。襲い来る敵をものともせず、見事に敵を防いだ正行。和睦の席上、正行は父・正成の活躍を物語り、酒宴を楽しむのであった。

■吉野天人（よしのてんにん）　吉野の桜をみに吉野山を訪れた都の人たち。満開　の桜を見に、山中へ進んでいると、一人の女性と出会います。この女性とともに花見をする一行。やがて女性は「自分は天人である」とあかし、夜も吉野山にとどまり、また信心をするなら、古の五節の舞を見せようと約束するのでした。

※流派によって謡曲の内容は異なります。本資料では『校注日本文学大系 謡曲上・下』を参照しました。



吉野町内の
謡曲（能）ゆかりの場所・伝説地

吉野町内にのこる謡曲や能にゆかりのある場所

【吉野山地区】

青根ケ峯　吉野山の最奥にある山です。『万葉集』にその名前が見えたり、『続日本紀』の吉野の水分山に比定されています。

謡曲では、『吉野琴』『吉野優婆塞』『吉野桜』『嵐山』で名前が登場します。

嵐山　謡曲『嵐山』で京都の嵐山に吉野山の桜が植えられたことが紹介されていますが、吉野にも同じ嵐山の地名が残ります。また、同地は『芳野行幸』などでも紹介されています。

威徳天満宮　金峯山寺蔵王堂の前にある、日蔵上人ゆかりの神社です。謡曲『宮滝』で紹介されています。

大峯奥駈道　山伏が大峯奥駈修行をする道で、熊野に通じています。謡曲『聖宝』では、ここに巣くう大蛇を聖宝が退治します。

勝手神社　吉野山を代表する神社の一つで、袖振山の麓にあります。現在は焼失しています。

この神社の神・勝手の神や勝手神社は、謡曲『袖振山』『御影山』『芳野琴』『芳野行幸』『嵐山』『弁内侍』などでその名前を見ることができます。また、勝手神社の神職が物語の重要な人物として登場する作品として、『二人静』『芳野小町』などがあげられます。

さらには、勝手の神達が大海人皇子を守ったと『よし野の川鮎』で描かれます。また、勝手神社のあたりとみられる勝手の里は、『久米仙人』の物語の舞台となっています。

銅の鳥居　大きな鳥居で、大峯山までの間にある四門の最初に当たります。発心門とも呼ばれる行場です。謡曲『宮滝』で紹介されます。

金峯山寺蔵王堂　謡曲では、金峯山寺という名前がそのまま出てくることは少ないですが、ご本尊である蔵王権現が、吉野や吉野山を代表する神仏としてよく描かれています。

謡曲『義経』（新作）では義経とわかれた静御前が蔵王権現の前で舞う様子が印象的に描かれます。そのほか、蔵王堂は『宮滝』などで登場し、蔵王権現は『吉野優婆塞』『吉野桜』『国栖』『よし野の川鮎』『都藍仙』『芳野行幸』『嵐山』、また豊公能の『吉野詣』などで登場します。

雲井の桜　『新葉和歌集』などで紹介された、吉野山の桜の名木でした。謡曲では、『袖振山』『吉野優婆塞』『宮滝』で紹介されています。

西行庵　西行法師が住んだと伝わる庵跡です。散逸して内容は分かりませんが、謡曲に『吉野西行』というものがあった様です。吉野の桜か、この西行庵にかかわる内容だったと思われます。

佐藤忠信花矢倉　源義経が吉野山を逃れる際、お供の佐藤忠信が戦った場所と伝わります。

謡曲『吉野判官』『忠信』『吉野忠信』等で「佐藤忠信が矢をふさいだ」とでてくるのは、この場所のことでしょう。

四本桜　金峯山寺蔵王堂の前に植わる四本の桜です。護良親王が最後の酒宴を催した場所と伝わります。

謡曲『吉野優婆塞』や『吉野桜』などで紹介されます。

袖振山　天武天皇が勝手神社の前で琴を弾くと、天女が天下り、羽衣の袖を翻したため、袖振山の名前がついたといいます。宮中でおこなわれる五節の舞の起源の地とされています。謡曲『袖振山』『吉野優婆塞』『吉野山』に登場します。

滝桜　吉野水分神社付近から下手にかけて、山一面に咲く桜を総称して滝桜といいます。吉野山の桜の名所の一つで。謡曲『袖振山』『宮滝』などで紹介されています。

布引桜　吉野山の桜の名所の一つです。謡曲『吉野優婆塞』ではこの桜を意識したフレーズが登場します。また、『袖振山』などでは、吉野山の桜の名所の一つとして紹介されています。

女人結界碑　今は機能していませんが、青根ケ峯付近にある女人結界碑から先は、かつて女性の立ち入りが禁止されていた場所でした。

謡曲『都藍仙』では、女性の仙人・都藍仙が金峯山（大峯山から吉野山にかけての一帯）に登ろうとしたところ、女人結界の地であるため登れなかった、という物語が描かれています。

一目千本　今は吉水神社からみる桜の景色を一目千本とよんでいますが、かつては今の下千本にあたる場所を一目千本とよんでいました（明治時代に吉野山を訪れた渋沢栄一の記録などによる）。謡曲『吉野桜』で紹介されています。

御影山　袖振山で天女が舞った時、その影がこの山に映ったので御影山と名付けられました。古記録によれば佐柳神社の境内にあったようですが、現存しません。謡曲では、この山の話題をそのまま取り上げた『御影山』があります。

吉野水分神社　勝手神社の神や蔵王権現とともに、吉野山を代表する神として謡曲では登場します。吉野水分神社は水の神様を祀る神社ですが、「水分の神」が転訛して「御子守の神」となり、子どもを守る神さまとしても信仰を集めました。また、子守のほかに木守の字があてられることも有りました。

謡曲『御影山』『芳野琴』『芳野行幸』などで、「木守」という名前が出てきます。『嵐山』では、木守と勝手の神とが、吉野の桜に宿って京都の嵐山の桜を見守っていますし、『よし野の川鮎』では大海人皇子を守った存在として登場します。

吉野山　謡曲の中には、物語の舞台を吉野山とだけ紹介するものもあります。

義経や静御前、佐藤忠信の話を描いた謡曲『吉野三位』『吉野判官』『吉野静』、南北朝時代の楠正行を取り上げた『楠花櫓』『正行』『弁内侍』、鎌倉で幽閉される大塔宮（護良親王）が吉野山等に思いを馳せた『大塔宮』、大海人皇子の物語を描く『五節』、吉野山を訪れた人物のエピソードを語る『吉野山』『吉野天人』などです。また、地名を紹介する『葛城』『国栖』などもあります。

吉野山の桜　桜の名所として知られる吉野山。謡曲でも吉野山の桜はよく登場します。謡曲『芳野行幸』『芳野小町』『吉野桜』『白菊』などで紹介されています。

吉水神社　かつては吉水院というお寺でしたが、明治のはじめに神社となりました。源義経や後醍醐天皇を匿ったり、豊臣秀吉の宿となるなど、歴史上の様々な人物が訪れた神社（寺）とされます。謡曲では、吉水の住僧が登場人物として現れる『吉水』があります。

【水分・上市】

六田の淀　『万葉集』で詠まれた「六田の淀」、また、吉野山へ向かう渡し船の場所として知られています。吉野山を訪れる謡曲ではよく登場する場所で、『芳野小町』『袖振山』『吉野桜』『宮滝』などで登場します。また、六田の淀が舞台の『六田淀』という謡曲もあります。

吉野川　紀ノ川上流部の名前で、吉野町を流れる川です。謡曲の世界では六田の淀と同じく、吉野の外の人が吉野山を訪れる際などによく登場します。登場作品としては、謡曲『芳野小町』『吉野三位』『忠信』『楠花櫓』『宮滝』『国栖』『正行』などがあります。

【中荘】

うたたね橋　宮滝の対岸、喜佐谷の入口にかかっていた橋の名前です。源義経がうたたねをしたので、この名前がついたと伝わります。

謡曲『うたゝねの橋』はこの橋を舞台にした物語ですが、場所に混乱がみられます。

象山　宮滝の対岸にある山の一つです。『万葉集』の歌などで詠まれる、「象山」にあたるとされています。『万葉集』を扱った謡曲『吉野』（新作）では、象山周辺が物語の舞台になります。

桜木神社　大海人皇子が、この場所にあった桜の下に身を潜め、追手から逃れたと伝わる神社です。謡曲では、『二人静』で紹介され、『宮滝』では桜木明神が旅の僧を宮滝へ案内しています。

菜摘川　菜摘を流れる吉野川のこととされています。『万葉集』などでも詠まれた場所です。謡曲『五節』『国栖』『二人静』で紹介されています。

宮滝　古代の吉野宮があったとされる場所です。また、宇多上皇の行幸も行われた場所でした。

謡曲『二人静』で紹介されているほか、『吉野』（新作）では作品の舞台となり、聖武天皇に仕える笠金村が侍宴の折の歌一首をつくるために悩む様子が描かれます。また、『宮滝』では宇多天皇が行幸された際の歌を紹介しています。

三船山　『万葉集』で詠まれたことで知られる山です。今は宮滝の対岸にある山とされていますが、かつては吉野山から見える別の山に比定されていました。作品によって、その所在地に混乱が見られます。謡曲『宮滝』や『吉野山』で登場します。

【国栖】

片腹淵　国栖の翁が献上した鮎を、大海人皇子が片身だけ食し、残りをこの淵に投げ入れたところ、片身の鮎が泳ぎだしたと伝わります。

場所の名前こそ出てきませんが、謡曲『国栖』や『よし野の川鮎』でこの物語が描かれます。

国栖川　国栖を流れる吉野川のことでしょうか。謡曲『国栖』で紹介されます。

国栖の里　遅くとも江戸時代には、国栖は大海人皇子を匿った場所として、広く知られていました。謡曲『よし野の川鮎』や『国栖』で、大海人皇子を匿った国栖の翁の話が登場します。また、『玉の国栖』という謡曲もあったようです。

ジジ河原・ババ河原　国栖に逃れた大海人皇子を、国栖の翁が船の下に匿った場所と伝わります。皇子の隠れる船を嗅ぎまわった、敵方の「嗅ぐ鼻」の犬は、この場所で翁に殺されたといいます。場所の名前こそ登場しませんが、謡曲『国栖』でこのエピソードが描かれます。

天皇淵　片腹淵と同じ伝承が残る場所です。この淵に残る伝承と同じエピソードが、謡曲『国栖』や『よし野の川鮎』で描かれます。

【竜門】

仙人の岩屋　久米仙人が過ごしたという岩屋です。現在は見ることができません。かつては立派な岩屋があったらしく、宇多上皇が立ち寄られた際、お供の二人が涙を流して感動し、なかなか離れようとしなかったと記録に残ります。謡曲『竜門寺』で紹介されています。

竜門寺　義淵僧正の創建と伝わる、古代寺院です。久米仙人が修行した場所、また、『伊勢集』で伊勢という女性がこのお寺に詣でたことが記録されています。藤原道長も訪れたお寺でした。

『竜門寺』は、このお寺が舞台の謡曲。作中では、伊勢の幽霊も登場します。

竜門の滝　竜門寺の眼下を流れる滝です。松尾芭蕉が句をよんだことなどが知られます。

謡曲『龍門寺』では、この滝も紹介しています。

【その他】

場所不明　吉野に住む人が主人公などとなる作品があります。例えば、吉野に住む天狗が、ひろい世界を見たいと中国に渡る謡曲『吉野天狗』、吉野の男が西大寺で幼子をひろう『百万』、峯の坊で修行をした『吉野道成寺』などです。